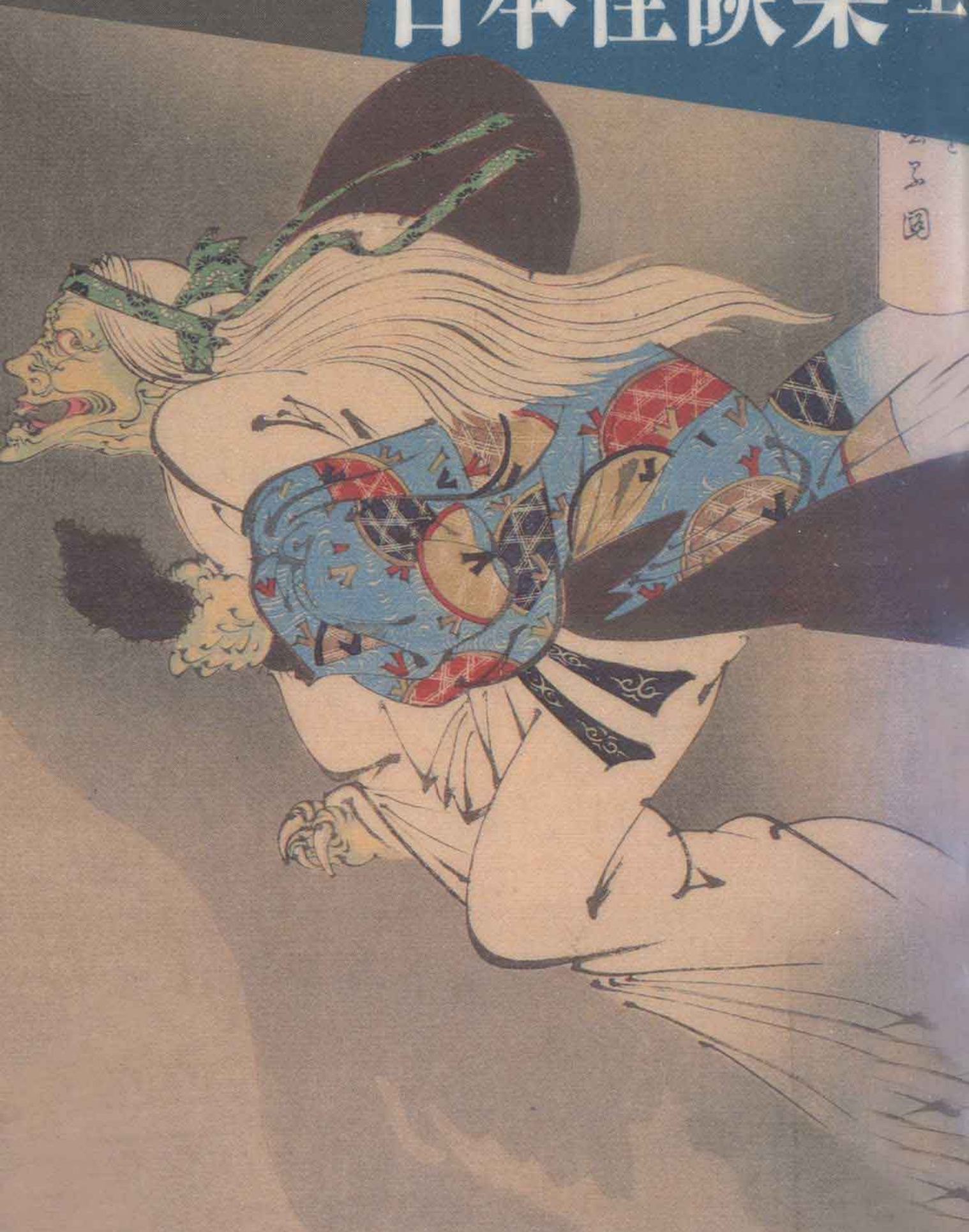
種村季弘 編

日本怪談集 上



河出文庫

kawade bunko

日本怪談集 上

◈

編者 種村季弘

一九八九年七月二五日 初版印刷
一九八九年八月 四 日 初版発行

発行者 清水勝
発行所 河出書房新社
〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷二-三二-二
☎〇三-四〇四-八六一一（編集）
〇三-四〇四-一二〇一（営業）
振替口座（東京）〇-一〇八〇二

デザイン 粟津潔

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。
©1989 Printed in Japan
ISBN4-309-40244-5

文庫

日本怪談集

江苏工业学院图书馆
藏书章

種村季弘 編

kawade bunko

河出書房新社

日本怪談集 上／目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〈家〉

ひこばえ　日影丈吉　9
母子像　筒井康隆　31
化物屋敷　佐藤春夫　57
化けもの屋敷　吉田健一　75
出口　吉行淳之介　97
百物語　森　鷗外　113
山ン本五郎左衛門只今退散仕る　稲垣足穂　133

〈坂〉

遊就館　内田百閒　185
貉（むじな）　小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）　201

鼠坂　森　鷗外　207
車坂　大岡昇平　221

〈沼〉
沼のほとり　豊島与志雄　233
幻談　幸田露伴　249
紅皿　火野葦平　277
鯉の巴　小田仁二郎　293

〈場所〉
老人の予言　笹沢左保　303
怪談作法　都筑道夫　319

怖いこと　武田百合子　335
わたしの赤マント　小沢信男　343
終の岩屋　半村　良　365
雪霊続記　泉　鏡花　373
髑髏盃　澁澤龍彦　387
*
解説　種村季弘　409
出典一覧

日本怪談集　上

著者紹介＝高遠弘美

ひこばえ

日影丈吉

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

日影丈吉（ひかげ・じょうきち）

一九〇八年、東京深川に生まれる。本名片岡十一。アテネ・フランセでフランス語を学び、フランスに渡ってほぼ三年を過ごす。帰国後は、文化映画の製作や料理のフランス語の指導などの仕事に従事。戦後になって、ミステリーを書きはじめる。一九五〇年、「かむなぎうた」で認められ、小説家としての地歩をかためた。とりわけ幻想的短編を得意とし、固定読者も尠くない。おもな作品に、『女の家』『内部の真実』『恐怖博物誌』『幻想博物誌』などがあるが、博識を生かしたアンソロジーの編者としても著名。

一

東京の街を車で通りながら、ときおり、はっと息をとめるものがある。家だ。ふしぎな家を見るのだ。何がふしぎかはちょっと説明できない。そういう家は、その環境に合って美しい。いいながめになっている。そのくせ一方に何か周囲に拮抗するような顔を持っていて、はっとさせるのだ。

いま顔といったが、たしかに家には顔がある。ゆったりとからだをひらいて顔を見せているのもあれば、眼を閉じ口を結び見られるのを嫌がって、しかめ面をしているのもある。渋谷の並木橋にちかいところにその、からだをひらいている方の家があった。はじめて通る裏通の道の屈曲と共にその家は展開していた。かなり大きな赤い洋館だった。

つかの間のことだから何をする家か見きわめるところまでは行かなかったが、いいなと思った。ところが通りすぎてから気になりだした。どこかおかしい。家のあけっぴろげの顔が薄笑いをうかべていたように思えたのだった。この家の前はふしぎに二度と通らなかった。並木橋を渡っても、家の前には出ない。いつも表通を通るのか赤い家にはお目にかからない。従っていまだに何をする家だったのかもわからないのだが、私はたぶんもうなくなっていると思う。

火事で焼けてしまうとか取毀しにあうとか。もしまだあるとすれば家の持主が破産して空家になっているとか、とかくいい想像はできない。私に写真がうまくうつせたら、こういう家を撮っておいて写真集でも出したら、おもしろいかと思ったこともあるが、そんな本を買う酔狂な人間がいるかどうか。だいいちそういう家が、ほかの人にはふしぎに見えるかどうかも疑問だった。

これはしかし何でもないことが私にだけ、へんに見えるのではない。並木橋の家はほんの一例だが、ほかの家で私が何度も見、自分でしらべたこともあるのだから、このふしぎさは錯覚や何かではない。ほんものだ。

目黒に住んでいたころ、G坂の方からM通に出て芝公園を抜け都心に出る道を、私はよく車で通った。だらだら坂をおりてM通にむかう正面に、いつもあらわれるのがその家だった。もし、ほかの方角からM通に出ていたら、私はこの家に気がつかなかったろう。坂の真正面に古めかしい二階建て洋館の肩を張って立っていたから、見逃すはずもなかったが、私はやはりこの家をおもしろいと思い、ちかづくのを車の中から見まもった。同時に何かおかしいと思って見ていた。

車はその家の前で左に曲る。だから、その家を近くで見る時間は、あまり長くない。そして、その家に興味を持つのも車が坂の途中にいる時だけだ。家の前を通りぬけてしまうと、私はきまってもう家のことは忘れていた。だから私がある日、その家のちかくで車から降りたのは、まったく偶然の気まぐれだったのだ。そこで車を棄てずに乗りついで行ったとしたら、行先で多少時間の余裕があっただけで、その家のことは忘れていたろう。その後もそこを通るときしか思いだすことはなかったに違いない。

だが、そこで降りてしまった以上、事情は違って来た。私ははじめて自分で思うままに、その家を見ることができた。家は車の中から見ていたときよりも大きく見えた。総体にくすんだ灰色で、ところどころ左官仕事の彫刻がほどこしてあるのが、古めかしく見える。壁はそのまま二階の大屋根まで伸びていて、中のようすは外からでは、まるでわからない。おかしいのは、この家が何をする家かを示すようなものが何もないのだ。一階の入口は古いドア一枚で、そこにも何も書いてなかった。

表はかなり賑(にぎ)やかな通りである。近くに大学もあるので学生も通る。だが、こんな古い町並には、こんな何の表示もないような家が一軒や二軒あっても、ふしぎではないのかも知れなかった。すべての人が必ずしも自己表示に熱心とはいえないかも知れない。私は入口の戸に手をかけてみた。あかない。中から錠がおりていた。

二三軒先に自動車の部品を作っているらしい家があって、そこにだけ人影が動いていた。実は私には何を作っているのかわからなかったけれども、そこへ行って聞いてみた。

「あの家ですがね。あれは何をする家ですか」

「たしか瓦斯(ガス)会社の出張所でしたよ」と若い男がこたえた。

「いまは空家ですか」

「そんなことありません。ちゃんと留守番の人が住んでますよ」

「一人で……」

「いいえ。おくさんも子供もいますよ」

すこし意外だった。表示のない家だから空家だと思ったのも無理はないだろう。だが、そうでない場合もあった。しかも留守番がいた。留守番というのは何をしているのか知らないけれども、とにかく瓦斯会社に関係のある者だろう。私はなんとなく、ほっとしていたのでもある。

それからしばらくその家のことは忘れていた。だが荒木君が訪ねて来ると、また思いだした。荒木君はたしか芝の探偵局につとめていた。あの家からはそれほど遠くないところだった。私立探偵という、ちょっと変った職業をやっていた。私は彼に例の家のことを話した。その家がなんとなくおかしいとか、そんなことはいわなかった。ただ、すこししらべてみてくれないか、とたのんだ。

いってしまってから後悔した。その家の人は私とはなんの関係もない。どんな人だかも知らない。それをしらべて、どうしようというのか。ただ家がおかしいというだけで。それもどうおかしいと、はっきりしているわけでもないのに。だが、いってしまったことは、しようがなかった。荒木君は私が突然その家のことを持出したのを別に何とも思わないようだった。その程度のことなら会社に通す必要もないから、ついでにしらべてあげます、といった。

こうして私はその家と、まるで無関係でもない状態だった。私は荒木君に調査をたのんだ。荒木はそれきり、しばらくやって来なかった。私はほとんどその家のことを忘れていた。だが私とその家のあいだは何となく、つながっているという状態だった。

荒木君がまた姿を見せたのは一月いや二月もたってからだろうか。私が部品屋を訪ねたときは、あの通りの高いところにある春日神社に、まだ八重桜が咲いていたのに、もう表を歩くと暑くて

帽子がいるようになっていたからだ。
「あの家はかなりひどい状況ですよ。どういうお知合いですか」と荒木はきいた。
「知合いってわけじゃない。ちょっと気になったんでね」と私は口を濁した。
「ひどいというのは、どういうこと」
「あそこはもう瓦斯会社じゃ使ってません。ただ、あの家をどう処理するっていうんじゃなしに、菱田って男を残務整理においといた。それがそのままになっているんですな。会社側の話ですと、中はもう相当いたんでて、羽目板の抜けてるところもあるし、屋根裏の見えるところもあるそうです。到底あのままじゃもう使いものにならない、といってます」
「ひどい状態というのは、そのことかね」
「いや、わたしのいうのは菱田の方ですよ」と荒木君は顔をしかめた。
「菱田の細君はもう長いこと寝こんでいるそうです」
「病気は何だね」
「結核らしいですな」
「結核ならなおるだろう」
「それが相当ひどいようですな。済生会の病院に入っていたのが何かの理由で家に帰されたそうです」
「すると細君は家で寝ているわけか」
「それだけじゃないんですよ。中学二年の息子がいるんですが、学校で怪我をして、これも家で

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com